

鷹羽狩行



句集
十二星

角川書店

数といふうつくしきもの手毬唄

ちちははの国に寝惜しみ星月夜

しづけさに加はる跳ねてゐし炭も

一寸にして火のこころ牡丹の芽

天国の鍵銜くはへ来よ揚雲雀

新涼や素肌といふは花瓶にも

橋の上まだ明るくて秋の暮

あめつちの地のあるかぎり鋤始

前山のたちまち背山涼み船

道あるがごとくにしぐれ去りにけり

翁眉わがこととなり初鏡

寒泳の白一本を締めしのみ

橋ひとつ越え摘み足りし芹なづな

手に頬に鋭とき葉の触れて松納め

松過ぎの手足の爪も伸びにけり

かまくらの灯ともし頃を雪女

ぼん天を横にし縦にして運ぶ

陶片のごとくに散りて寒薔薇

庭竹の影みどりさす障子かな

寒鯉や形のごとく影の添ひ

きさらぎや印泥こねて朱を覚まし

あたたかや反転の鯉渦を生み

鶯や火が火を責めて窯の中

一石もて湖^{うみ}へあいさつ朝桜

雨あしに押されて淵の花筏

矢車の鳴りをひそめて星の中

雨だれのしばらく残る軒菖蒲

梅雨寒や頭かしらのつきし魚の骨

あぢさゐを鼓打ちして山雨かな

若葉して城を高きへ押し上ぐる

透きとほること美しき水母かな

貝殻に瀬戸の夕焼けひと掬ひ

草もつれあふこともなく草清水

三伏やこぼれて赤き崖の土

尾に鱗にこもるせせらぎ下り鮎

秋の蚊のこゑ手枕のうしろより

もみぢ・きのこと決めかねて狩ごころ

一本の楊子のこして月の客

月もまたひとりの客や月の句座

こほろぎや壁にいくとせ空からの魚籠

継ぐといふことのさみしき夜なべかな

釣竿が過ぎ櫂が過ぎ秋日和

踊る夜の坂ゆるやかに風の盆

大鯉は影を重ねず菊日和

火の山の火種をもらひ雪女

濡縁に月がべっとり雪女

黒きもの鴉となりぬ初明り

月の夜を重ねふくらむ福寿草

またたきにみどりさしそめ雪解星

囀りのひとかたまりを水の上

裏山のけはひにをはる初音かな

火といへるなめらかなもの芝を焼く

一片は塔の上へと落花かな

外出そとでなき日の手洗へば遠蛙

忙中に更衣てふ閑ありて

今日よりの素足に踏めばしきゐ闕あり

隣人の薔薇いくたびも盗み詠む

ぐい呑みは厚きがよけれ初鯉

まくなぎの支離滅裂を水の上

千枚の田に張る水の走り出す

一村が通夜のしづけさ夏の月

不死男忌や玉の地酒を舌の上

水打つて今日の残りの時つかふ

大富士を傾けて飲むラムネかな

かりがねやしたたか利いて旅の酒

木の實拾へり鉦脈の尽きし山

刃の声を湖に放ちて鴟の秋

雨音をはじきて伊勢の虫しぐれ

日のひかりまぶしむさまに返り花

飛ぶものは灯を点じつつ初夜空

般^{さい}
ひとつ畳の上
に寝正月

春寒やし
ばしふふ
みて鯛の骨

下萌のやう
やく丈を
もちそめし

夢の端^は
のそのまた
先の猫の恋

飛びたた
たぬやう
に鶯餅はこぶ

目の下をめのこで測り桜鯛

わが立ちて壺のごとしや春の空

汝^なを詠みし誓子は西に春の鴨

流木の隆々として芽吹かざる

ものの芽や誓子旧居はただ平ら

日のありしところに月や山ざくら

しばらくは昼寝重りの手足かな

四五日は位置のきまらず扇風機

金串の熱きをもって暑気払ひ

万緑を二分けにして最上川

踏みたけれじゃがたらいもの花置

旅は時の流れやすくて閑古鳥

水かへてくもる水差けさの秋

抜くに鶏頭がしぶとき力だす

郡上のなあまでは踊れて狩行かな

栗青し雲にもありて旅ごころ

面目の嵩とはならず茸狩

矢のやうにいつてしまひぬ雁渡し

秋風や肘をたひらに置く机

廻廊のくれなゐまざと鯨の潮

遠山をなぞりし指の冷たさよ

安曇野や夕日はなさぬななかまど

色変へぬ松には齢なきごとし

冬めくや異人にありて鼻のかげ

溢れ出て玉のひびきの柚子湯かな

句集

十三星

発行 平成十三年九月十日
著者 鷹羽狩行
発行所 株式会社 角川書店
定価 二千六百円（税別）

PDF制作 俳誌のサロン